

木との關係に論及してゐる。小野晃嗣氏の「興福寺鹽座の研究」は、寛正より文明年間に至る頃の興福寺の大乗院一乘院に依存する鹽座の分析に主力を注ぎ、更に文明以後織豊時代座が廢止されるに至る迄の、政治的經濟的變遷に伴ふこれら座衆の推移を時代的に論述してゐる。最後に阿部眞琴氏の「明治維新に於ける社寺領の處分」は先づ信長秀吉の時代から江戸時代各藩に行はれた寺院領削減、排佛論を説き、明治維新の排佛毀釋それに隨伴せる土地問題を究明して、こゝにも亦明治維新全體の持つ性質が窺はれると結んでゐる。

以上五篇の論文を通じて、その例證の擧出に於て、數字的統計的研究に於て殆んど間然する所なき程詳密に互つてゐる點は近時斯界の動向を示すものであり我々の深く敬服する所である。又五篇の内、寶月、中村、小野三氏が共に中世の興福寺を中心に取扱つて居らる事は、偶然の一致とも言へようが、又大乘院寺社雜事記刊行の意義を深からしめるものでもあらう。

本書は宗教復興の角笛高らかに鳴り渡る秋、宗教乃至

寺院の本質理解に對して貢獻せん爲公にされたといふ。而してこの書によつて寺院の經濟的社會的方面は深く深く下けられてゐる。唯我々は望蜀の謗を免れないかも知れぬが、更にこの寺院の有する社會的經濟的側面が如何に緊密に本來の宗教的思想的側面と關聯してゐるかを究明して欲しいと望むのである。(菊判三三四頁、東京三教書院發行、定價壹圓八拾錢(時野谷))

○朝鮮の姓名氏族に關する研究調査

今村 鞞著

朝鮮總督府中樞院に於てはその事業の一として夙に朝鮮舊來の風俗慣習の調査を行ひ、その業績は「朝鮮婚姻の研究」朝鮮人の親族範圍」等の書となつて既に幾多公にせられてゐるが、此度刊行せられた標記の書は専ら朝鮮の姓名及氏族に關する諸事項に就いてその現狀を主とし、併せてその歴史的沿革をも記述考證したもので一同院囑託今村鞞氏の筆になるものである。

由來朝鮮に於ける人名の稱呼は、古くは固有の命名法

のあつたのを、支那文化の浸潤と共に漸くその風に化して支鮮折衷のものとなり、後更に殆ど全くの支那式にまで固定すに至つたのであるが、かゝる外的影響を除いては國內に於ける政治的・社會的動亂による混亂の比較的稀なりし結果として、今日なほ舊き慣習の遺り傳はるものが多い。例へば「名あつて氏無し」といはれた一般庶民に於ては貴族士班に於けるが如く加冠に際して冠名を命けることなく、兒名のまゝを呼ぶを普通としたので、その名には舊來の命名法の認められるものが少なくなく、また他方貴族の間に於ては姓を以て一種の社會的榮譽の標識と見做すところから永く之を改めず、廣く庶民の姓を稱するに至つて後もその種類は限られてゐて我國内地に於けるが如く、自由に新しき姓を選ぶことがなかつた。従つて朝鮮に存する姓の總數は内地のそれに比して遙に少く、本書に採録せられたるもの都て三百二十六姓、その數は別に發表せられてゐる國勢調査の結果と多少の出入あるものゝ如くであるが、いづれにもせよ、内地に於ける一郡内の姓の數にも遠く及ばないのである。(わが内

地に於てはこの種の調査の未だ全國的に爲されたのを聞かないが、前年信濃教育會東筑摩郡部會がその郡誌の別編として編纂した「東筑摩郡家名一覽」には同郡のみにて實に千二百五十種の姓が擧げられてゐる。)かくの如き大いなる相違は確に寧ろ内地に於ける特殊の事情に因由するものとして了解せらるべきではあらうが、われわれとして逆はその映發によつて朝鮮の社會の特性を窺ふことも出来るであらう。尤も、本書はかくの如き問題に就ては立入つて多く論及する所はないが、それは唯現状の記述を主とする此書の立場より當然のことであり、寧ろ歴史家や社會學者の今後の討究に俟つべく、われわれは茲にその基礎となるべき正確なる資料を得たことを喜び、著者の勞に多謝すべきであらう。

最後に編外餘説として著者も述べられてゐることであるが、朝鮮の現状は古來の姓氏に關する觀念は急激に稀薄となり、新しき社會生活上の必要からも古き慣習は續々と壞はれつゝある。本書の如き調査の公刊せられるのも實にかゝる狀態に應ずるものであり、古くわが新撰姓

氏録編纂の昔を憶ふと共に、本書も亦時代の歴史的モニュメントとなるべきを思ふのである。(菊判四九一頁、口繪二葉、朝鮮總督府中樞院發行、賣價未詳)(柴田)

○樂浪彩篋塚 朝鮮古蹟研究會

人物を描いた竹製漆塗のバスケットが樂浪の一古墳から出土したことに就いては一部の人々の間に於ては當時早くも知られて居たことであらうが、一昨年濱田博士に據つて東方文化學院京都研究所の記念講演に際し、この一端が紹介せられてから、その人物畫が漢代畫像石に通するところが有るにとどまらず、其の筆致色彩等の優秀な點から、當代繪畫の實相を推さしむる有力な資料として一般に深き興味と關心とを與へ、これが詳細なる發掘報告の一日も早く發表されんことは等しく待望された所であつた。

偕てこの樂浪彩篋塚と題する發掘報告書が其の待望に對ふるものたる固より言を俟たぬ。先づ其の内容は序説第一編第二編後説に分ち、第一編に於ては上記バスケット

トの發掘された大同郡南串面南井里の古墳に就いて記して居る。これは横穴式系統に屬する木槨墳で羨道前室主室から成り、主室には木棺三個と木馬木偶等の存在が注意されるが前室の副葬品に比すると遺物の發見が稍少ない。前室の遺物は見る可きもの多く、就中このバスケット所謂彩篋を第一に擧げる。これは大略長さ40cm幅30cm高さ20cmの長方形の籃胎漆器で、其の周縁及び身の立上りの部分に漆枠を作り、これに朱赤黃濃綠茶褐薄墨等の色漆を用ひて繫菱文龍文蕨華文雲文斜格子文等を施し、これに加ふるに大小九十餘の人物が描かれて居る。

この内大きく描かれた人物に傍記の存するものがあり、それに據るとその人物が當時人口に膾炙した孝子傳等を題材としたものであることが知れ、猶山東武氏祠の畫像石のそれと一致したものすら存する。其の描法は顔手等の輪廓は毛の様な細線を以つてするに反し、衣服の如きは却つて大體粗略な描線を用ひて居る。色彩の點に於ても男女の顔など色を異にし衣服に於ても勿論その配合と調和に留意されて居る。歴代帝王圖などを聯想せしめる